

1. 展示事業

地域の自然に親しみ、知識を深めることができるように、身近なフィールドである生田緑地や川崎の星空と連動した展示を行います。  
 市民・利用者が最新の情報に触れられるよう、日々移りゆく自然の様子や最近の研究成果などを反映した展示の更新を行います。  
 市民・利用者の疑問や興味関心にきめ細かに対応した展示解説を行い、自然や天文、科学技術等へのより深い理解と関心につなげます。

(1) 自然展示

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●リアルタイムな情報発信と標本等展示資料の定期的な入れ替えによって展示を更新するしくみを確立</p> <p>●展示と連動した自然ワークショップの実施など、体験型の展示の充実</p>	<p>①生田緑地の自然についてのリアルタイムな情報発信（受付横「生田緑地マップ」やSNSを活用）</p> <p>②展示の追加および更新（生田緑地ギャラリーのコンテンツの追加）</p>	<p>①生田緑地の自然について、日常的に観察・撮影した写真等のリアルタイムな情報発信（受付横「緑地案内ボード（緑地マップ）」やSNSを活用）を定期的実施し、可能な限り更新を心掛けた。</p> <p>②常設展示「生田緑地ギャラリー」では、展示物の変更が可能な引き出し展示について、新たな展示の追加を検討した。実施まで至らなかったが、協議を継続して追加・更新を行いたい。</p> <p>③多摩川の自然コーナーに映像機器を追加し、多摩川流域の自然について興味関心を高められるよう努めた。</p> <p>④企画展「かわさきの植物（市民とともに調べて、記録した30年・『神奈川県植物誌2018』ができるまで）」の開催                  神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県植物誌調査会共催、特定非営利活動法人 かわさき自然調査団協力により開催。                  1983年から市民とともに実施している川崎市自然環境調査を植物分野に注目して振り返り、神奈川県植物誌とのつながり、そして博物館の調査研究について紹介した。</p> <p>達成度： 3</p>	<p>●「生田緑地ギャラリー」への展示物の追加について、現在の展示内容と重複しない展示内容を模索していく。</p>	<p>●リアルタイムでの情報発信、多摩川に関する映像機器の設置のほか、30年にわたる自然環境調査の植物分野について、企画展を開催したことは、高く評価できる。</p> <p>●写真等によるリアルタイムな情報発信は、生田緑地ギャラリーの展示内容の吟味を含め、新たな設置に向けて努力してほしい。なお、写真等によるリアルタイムな情報発信は、SNSに限ってはほとんど行われていない。</p> <p>●体験型展示に関してどのような企画を考え、実施していくのか、その策定が望まれる。</p> <p>●入館者数に関して、過去の統計との比較表が示されていない。具体的な数値を示し、実績・自己評価において言及すべきである。</p> <p>●独自データに基づく企画展「かわさきの植物」の開催は評価できるが、会期が年度をまたいでいるため、その評価は来年度に行われるべきである。</p> <p>評価： B</p>

(2) 天文展示

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●新型メガスター投影システムやアストロテラスと連携した新たな川崎方式の確立</p> <p>●プラネタリウムの番組やアストロテラスでの星空観察のプログラムと連動させた発展的な内容の展示の実現</p>	<p>①年間12本の一般向け番組の制作、投影</p> <p>②子ども向け新番組の制作、投影</p> <p>③学習投影の実施</p>	<p>①年間12の一般投影番組を自主制作し、投影を行った。また、「星空ゆうゆう散歩」、「ベビー&amp;キッズアワー」等、様々なニーズに合わせた投影を実施した。                  一般投影は2月末の段階で前年度を4%ほど上回る観覧者数となった。また、「星空ゆうゆう散歩」、「ベビー&amp;キッズアワー」には毎回多くの来場者がある。</p> <p>②土日祝日を中心に子ども向け番組の投影を行い、次年度より公開する新番組を制作をした。                  大型連休中や本年度より実施された「かわさき家庭と地域の日」等では子ども向け投影の実施回数を増やし、利用機会の拡大を図った。また、夏休み期間中は2本立てで投影し、うち1回は全編生解説による子ども向け投影を行った。</p> <p>③小中学校を中心に、利用する学年に応じた天文学習のための投影を行った。                  利用団体に事前のアンケートを実施するなどし、教員等と連携した効果的な学習投影が実施できた。</p> <p>達成度： 4</p>		<p>●小中学校向けの天文学習のために外部機関である教員等と連携した点は、利用者視点を取り込んだことにつながり、評価できる。</p> <p>●一般投影の観覧者が前年度比約4%増となった点は評価できる。増加の背景を分析することで、投影内容その他、今後の番組制作に活かされると考えられる。</p> <p>●館独自に収蔵する天文資料の洗い直しできれば、地域館としてのオリジナリティを教育普及事業へ付与させられる可能性もあるほか、収集保管や調査研究など、その他の博物館基幹事業とリンクさせる事もできるのではないかと。</p> <p>●一般投影も観覧者が興味を持つように常に天文分野の話題を投影を工夫してほしい。</p> <p>●利用機会の拡大は前向きな取り組みとして評価できるが、その効果がどれほどのものであったのか、数字で示されるべきである。</p> <p>評価： A</p>

(3) 科学展示

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●実験・観察の方法や成果を発信する展示による体験学習の充実</p> <p>●21世紀子どもサイエンス事業で活用している「ワクワクドキドキ玉手箱」（以下「玉手箱」）の紹介</p>	<p>①科学実験や工作の成果を発表する展示の実施</p>	<p>①これまで、科学ボランティア団体や科学館で行われている科学系の教室や講座の紹介を行ってきたが、今年度は、教室や講座において製作した、科学的な原理を利用した工作物の写真を掲載するパネル展を開催した。</p> <p>教室・講座のテーマではうかがえない、教室内で製作された工作物に関心をもって見る来館者が多かったのはたいへんよかった。</p>	<p>パネル展示だけではなく、今後、工作物の実物を展示することについての検討をすすめていきたい。</p>	<p>●工作物の写真パネル展示により、一般来館者にも見られるよう工夫した点は評価される。講座への参加を促す意味からも、今後は、工作物などの完成形のほか、制作過程や講座内容が俯瞰でいるような内容が検討されてもよい。</p> <p>●単なる講座紹介にとどまらず、実際の講座の様子を伝えようとする努力が見え、コミュニケーションの改善が図られたと考えられる。特にビジュアルに訴える展示は直観的に分かりやすく工夫が感じられる。</p> <p>●1ヶ月のパネル展示では効果が限られるので、どこか別の場所で長く展示できるとよい。実際の工作物についても展示できるとよい。</p> <p>●体験学習が中長期的な取り組みとして示されている以上、パネル展示は物足りない。課題として認識されているように、ハンズオンが前提となるべきであろう。</p>
		<p>達成度：3</p>		
				<p>評価： B</p>

\* アストロテラス： 市民が集い、スタッフと参加者が同じ星空を共有し、星空の美しさと宇宙の神秘を体験するための、観測機材を備えた天体観望用の施設

\* 21世紀子どもサイエンス事業： 川崎市で活動する民間団体・産業・学校と科学館が連携し、理科の好きな子どもや、科学に明るい市民を育てていく事業

\* ワクワクドキドキ玉手箱： 市民に科学の楽しさを伝えるための実験・観察の手引きや道具が詰まったツール

2. 教育普及事業

展示を活用した学習プログラムやフィールドワーク、実験等、体感・体験できる講座を提供し、実体験に基づいた生きた知恵を育てます。  
 市民・利用者の興味関心や学齢に応じてステップアップできる段階別の講座を提供することで、多様なニーズに応え、専門性を深めることができる学習支援を行うとともに、科学教育等に関する研修を充実させ、各分野の人材の育成や、指導者の養成に努めます。

(1) 自然体験

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●より多くの市民・利用者が生田緑地の自然に関心を持てるような、多様な内容・形態の観察会や自然教室を実施</p> <p>●活動フィールドを拡大し、多摩川水系をフィールドとした自然教室を開催</p> <p>●展示解説やワークショップ等を通じて、市民の交流と学び合いを実現</p> <p>●バックヤードツアーや一日学芸員体験等、解説やワークショップメニューの内容を深める</p> <p>●フィールドワークの学習効果を高める学校支援プログラムを開発・運用</p> <p>●ボランティア制度導入についての検討</p>	<p>①市域の自然を幅広く紹介する「生田緑地観察会」、「自然観察会」、「生きもの講座」の実施</p> <p>②身近な自然を素材にした「自然ワークショップ」の実施</p> <p>③川崎市内の団体と協働で、出版物「川崎のいきもの」（仮称）の作成計画立案</p> <p>④普段は公開していない博物館活動を支える自然史資料の収蔵・保管の現場を紹介する、「バックヤードツアー」を実施</p> <p>⑤自然、天文、科学各分野の調査研究、学芸業務の成果を取りまとめ、「青少年科学館紀要第29号」として刊行する。</p>	<p>①「生田緑地観察会」、「自然観察会（夏自然観察会～生田緑地のトンボ～・多摩川の冬鳥観察会）」を実施した。        新規事業として、「生きもの教室（生物多様性を知ってますか？）」、「未就学児のための生きもの教室（モグラってどんな生きもの？）」、「小学生のための生きもの教室（モグラってどんな生きもの？）」を実施し、広範な分野について、幅広い年齢層の一般市民へ向けた普及教育を行うことができた。</p> <p>②生田緑地をはじめ、身近な自然を素材にした館職員による「自然ワークショップ」では、観察会よりも平易な内容とし、とくに幼少な世代への啓発に努めた。</p> <p>③市域の自然環境調査の成果をまとめた一般向け普及用冊子「川崎のいきもの（仮称）」の刊行に向けて、体裁や内容、事前の準備作業（掲載材料の収集）について市民団体に指針を示し、意見集約を行った。</p> <p>④これまでの中学生以上を対象とした「バックヤードツアー」に加え、新たに「小学生のためのバックヤードツアー」を実施し、収蔵庫および保管標本の解説や供覧を実施することで、博物館基幹事業の周知や普及に努め、理解を深めていただくことができた。</p> <p>⑤各分野の調査研究、資料収集保存の成果は「青少年科学館紀要第29号」に公表する予定である。</p> <p>達成度：3</p>		<p>●「小学生のためのバックヤードツアー」、「生きもの教室」及び「多摩川自然に学ぼう」等の新規事業の取り組みとその実施は評価できる。実施しているフィールドワークの学習機能を高めるための学習支援プログラムの作成について期待したい。</p> <p>●教育普及事業の新規追加は一定の評価はできるが、収集保管および調査研究事業とのバランスや3基幹事業の本来的な流れを考慮すると、本事業で新たな枠組みを増やすよりも、現状で希薄になっている後の2事業を手厚くする方が先決であろう。</p> <p>●地層観察は小学校6年生の理科授業の一環として、多くの川崎市内の小学校に貢献しており、生田緑地にある立地をうまく生かした例と言える。</p> <p>●バックヤードツアーの対象範囲を小学生に拡大したことは評価できるが、バックヤードの重要性は短期的には納税者にこそ真っ先に理解されるべきことなので、その点を意識した戦略も必要であろう。所管部局職員を対象にすることも考慮されるとよい。</p> <p>評価： B</p>

(2) 天文体験

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●教員や児童生徒が自らプラネタリアムの学習番組を制作・投影できるプログラムの実現</p> <p>●専門家による講演や市民参加型の講座の開催等を通じて、市民の学習・交流事業を継続・発展</p> <p>●プラネタリアムの星空演出と、より多彩な芸術との融合の実現を目指した、連携先の開拓や演出手法の開発</p> <p>●星空を身近に感じ、広く宇宙に親しむことのできる事業の展開・充実</p> <p>●科学館の調査研究成果の天文学習への活用</p> <p>●プラネタリアム番組制作ソフトを市内全小中高等学校に配布し、プラネタリアム番組制作を支援</p> <p>●プラネタリアムを児童生徒が制作した番組を発表できる場として活用</p> <p>●ボランティアのスキルアップや、活動内容のステップアップを支援</p>	<p>①子ども向けプラネタリアムワークショップの実施</p> <p>②区民祭等、市民によるプラネタリアム投影の実施</p> <p>③プラネタリアムコンサート等イベント投影の実施</p> <p>④星空教室、天体観察講座の実施</p> <p>⑤天文サポーター研修の実施</p>	<p>①小学生を対象にプラネタリアムワークショップを開催し、子どもたちによる番組の制作と発表会を実施した。プラネタリアムワークショップは定員の2倍を超える申込があり、引き続き応募、参加する子どもも多い。参加者はプラネタリアムの操作、番組制作を通じて天文学への知識を深め、関心を高めることができた。</p> <p>②市民活動団体によるプラネタリアムでの活動が行われ、多摩区民祭での投影の他、自主的な発表会を行い、いずれも多くの来場者を集め好評だった。</p> <p>③東京交響楽団とのコラボレーションによるプラネタリアムコンサート、著名な写真家を招いたオーロラ上映会を開催し、計3回のイベントはいずれも事前にチケットが完売となり、アンケートや来場者の声もたいへん好評であった。</p> <p>④館職員が講師となる子ども向けの「星空教室」、館職員または外部講師による大人向けの「天体観察講座」を開催した。毎回定員を超える申込があり、熱心に受講する姿が見られた。継続して応募、参加する受講者も多い。</p> <p>⑤研修会の実施により新たな天文サポーターが参加し、既存のサポーターとともに活動を行った。また、本年度より新たに天文サポーター定例会を実施し、学習会等による資質向上を図るほか、サポーターによる「星を見るタベ」配布資料を作成し、市民サービスを向上させた。</p> <p>達成度：4</p>	<p>今後の課題</p>	<p>●アストロテラスとプラネタリアムを組み合わせたシステムを活用して各種イベントや講座実施して市民や子供たちに星空への関心と学習体験を深めていることは評価できる。</p> <p>●「星を見るタベ」「かわさき星空ウォッチング」共に、2,800人を超える参加者を得たことは評価に値する。又、夜間の運営にはうまくボランティアを活用することでやりがいの上では市民の参画意欲を刺激し、経費の観点では職員の負担を軽くしている点で評価に値する。</p> <p>●ワークショップが盛況なのに比べ教室や講座の参加者が少ないのは今後工夫してほしい。</p> <p>●実績・自己評価の記述から成果が上がっていることが読み取れるが、数字が示されていない。好評かどうかは主催者側の感覚ではなく、毎回参加者へのアンケートを実施し、その結果により示されるべきである。</p> <p>●定員を上回る応募者があったことは評価できる。参加できなかった応募者が、気軽にまた応募、参加できるような企画を実施してほしい。</p> <p>評価： A</p>

(3) 科学体験

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●多様な年齢層に向けた科学教室の開催 ●気軽に楽しめるサイエンスショーや、年齢や学習段階の異なる人々が共に学べる交流・学習イベントの実現 ●玉手箱や科学ボランティアを活用して、理科の好きな子どもや科学に明るい市民を支援 ●科学ボランティアの活動を支援 ●民産学官の連携を強化し、多様な人々の出会いと交流を生み出す科学イベントを開催 ●教材開発や学習支援プログラムの開発 ●ボランティアのスキルアップや、活動内容のステップアップを支援</p>	<p>①幼児から大人までを対象としたさまざまな科学講座やサイエンスショーの実施 ②玉手箱を運用し実演を行う科学ボランティアの育成（科学サポーター研修会） ③参加者の交流を生み出す科学イベントへの参加（かわさきサイエンスチャレンジ） ④学習指導要領にそった科学館の資料や資材を活用した学校の科学教育への支援及び情報提供</p>	<p>○今年度、日頃より中学生を指導している理科教員を招き、科学館にあまり来館する機会のない中学生を対象にした中学生向けの理科教室を実施した。また、要望の多かったロボットをテーマとしたプログラミング教室（主催・共催を含めて）を開催することができたのは、たいへんよかった。</p> <p>○今年度から始まった学校休業日「かわさき家庭と地域の日」には、市教育委員会学校教育部に協力して、臨時開館し、「かわさき家庭と地域の日・理科教室」を開催した。開催にあたり、市内小学校にチラシを配付するなどに努めた結果、予想外の多くの参加者を迎えることができたのはよかった。</p> <p>○大人のための科学実験教室は、毎年のことではあるが、講師やテーマによって、参加者数の増減が激しい傾向にある。講師の選定やテーマの工夫について、今後も努力する必要があると考える。</p> <p>○科学サポーター研修会には14名が参加し、研修会終了後、6名が科学ボランティアとして、科学実験教室や講座、実験工房などの講師・アシスタントとしての活動を始めることができたのはたいへんよかった。</p> <p>○かわさきサイエンスチャレンジでは、出展企業も多くなり、多くの市民に科学館の周知を図ることができた。 ※企業・団体出展数（平成29年度）16ブース ⇒（平成30年度）19ブース</p> <p>○科学実験教室では、事前の参加申し込みにメールフォームを活用しているが、これを利用した申込数が増加するなど定着してきている。</p>	<p>中学生向けの理科教室の開催については、開催時期についての検討が必要である。</p> <p>大人のための科学実験教室については、講師の選定やテーマについてよく検討する必要がある。</p> <p>メールフォームによる募集で、応募者数が増加した半面、希望しながら参加できない方の存在もある。教室などの事業数について既に、多くらい実施しているが、そのケアを含めて、どのようにしていくのか考えていく必要がある。</p>	<p>●科学への興味と関心を深めるために多様な年齢層を対象として実験や工作のための教室や講座の実施は評価できる。また、それを支えるサポーターのために研修を行い、研修を終えた人を科学ボランティアとして協力いただいているシステムを構築している。</p> <p>●限られた職員体制の中で、多種多様な普及事業を運営、実施している点は評価される。ただし、職員外への講師委嘱が大半を占める中で、その内容に関して、専門機関としての科学館側の監修やモニタリングが十分なのか明確ではない。また、既事業数を絞り気味とした分を、職員による自主的な講座に設定する方向性もあり得よう。</p> <p>●中学生や大人向けの実験講座も身近なテーマから多くの参加者を集める工夫が望まれる。今後も内容を工夫して続けてほしい。</p> <p>●自己評価は数値やアンケート調査の結果等を示して作成すべきである。</p> <p>●フォームメールによる参加申し込みのキャンセル率については、繰り上げ当選のシステムを整備することにより改善できるはずなので、検討されたい。</p>
		達成度：4		
		評価： A		

\* アストロカカー： 当館が所有する移動天文車の愛称。望遠鏡、ディスプレイモニター等を搭載し、市内学校等で観察会を行う。

### 3. 調査研究事業

川崎市は、東京都と横浜市に挟まれた南北に細長い地形であり、東京都との間には多摩川が流れています。市の北部では武蔵野の面影を残すような雑木林があり、自然が多く残っている地域と、南部の工場地帯をはじめとして都市化が進んだ地域があります。

このように、自然と都市の要素を包含する川崎市において、自然と人間の共存を考えるうえでの重要な要件を見だし、考察を深めることを目的として、学芸担当職員を中心に自然環境の調査や川崎で見られる天体の調査を行います。

また、科学教育を効果的に推進するために必要な調査研究を行います。

#### (1) 自然分野

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>●調査テーマの設定や発表方法の検討</li> <li>●職員と調査ボランティア、研究機関、自然調査研究団体等多様な主体との協働による調査の実施</li> <li>●既存調査の継続と調査対象の拡大の検討</li> <li>●学芸担当職員の専門性を活かした調査研究活動を通じて、地域の自然を継続的に調査・分析し、研究成果を公開</li> <li>●職員の専門性を高め、展示や学習プログラム等の博物館活動に反映</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①関連行政機関、大学機関と連携した調査研究</li> <li>②新たな対象の調査の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①これまでに継続で実施していた市内タヌキ調査（麻布大学との協働による食性調査）の調査結果を道路生態研究会第6回研究発表会で発表した。その成果は「青少年科学館紀要第29号」に公表する予定である。</li> <li>②生物多様性について、周知の状況や意識の現状を把握するために、川崎市青少年科学館の来館者、川崎市内の小学6年生、中学校3年生を対象に生物多様性に関するアンケート調査を行い、集計した。今後、調査結果を分析する。</li> <li>③神奈川県RDB 2006で絶滅危惧1B類に指定されているホトケドジョウの、生田緑地産個体群の系統（遺伝子）保存のため、神奈川県水産技術センター内水面試験場に、人工飼育・増殖研究を委託により継続して実施した。その成果は「青少年科学館紀要29号」に公表する予定である。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●長期にわたり継続されてきた二つの調査（ホンドタヌキとホトケドジョウ）の成果がこの度まとめられ、紀要論文として報告されることになったことは高く評価できる。</li> <li>●タヌキの調査は過去の年度分の取りまとめであり、ホトケドジョウの人工飼育・増殖研究は他機関への委託事業である点を勘案すると、本年度における自然史分野での調査研究は、ほぼ実施されていないのではないかと。</li> <li>●専門職員の研究テーマの設定に当たっては、本来、個々の職員の専門分野や独自性、着想に沿って自由に行えばよく、必ずしも一般市民へのアンケートによる必要はない。</li> <li>●③ホトケドジョウの系統保存については委託により実施とされているが、紀要29号の目次を見る限り、館職員が著者として参画していないのはなぜか？委託であっても、依頼元である館職員が主体性を持って著者の一人となるべきであろう。</li> </ul>
		達成度：3		評価： B

#### (2) 天文分野

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>●調査の成果の蓄積と市民・利用者への還元</li> <li>●ときどきの天文現象に合わせた調査を実施し、プラネタリウム番組に反映</li> <li>●学芸担当職員の専門性を活かした調査研究活動を通じて、市域でみられる天体を継続的に観測</li> <li>●職員の専門性を高め、プラネタリウムや展示・学習プログラム等の博物館活動に反映</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①明治大学との共同観測、研究の実施</li> <li>②市民参加による市域の星空調査の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①明治大学との連携による40cm望遠鏡を使った木星等の観測を行い、同大大学院生が修士論文としてまとめた他、地球惑星科学連合大会等の学会で発表した。また、アストロテラスで観測した画像をプラネタリウム投影等に活用する他、SNS等での情報発信に活用した。</li> <li>②市民参加による星空調査を夏季と冬季に実施し、市民からのデータ収集及び職員による観測を行った。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●明治大学との連携による観測およびその学会発表は評価されるが、「調査研究」の最終的帰結として、当館紀要も含めた出版公表を目指してほしい。</li> <li>●施設が大学院での研究に利用されたことは評価できるが、学会発表の内容が年報から読み取れない。館職員が発表者の一人として主体性のある関わりを持ったのかを明記すべきである。</li> <li>●観測結果の投影への活用やSNS上での発信は、「教育普及事業」に含まれるべきである。</li> <li>●市民による星空調査は、どのくらいの市民がどの程度データを収集したのか、そしてそのデータと職員により観測された結果から言えること（解釈）は何かを実績として記述すべきである。</li> </ul>
		達成度：3		評価： B

(3) 科学教育

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●研究成果を蓄積し、21世紀子どもサイエンス事業を中心とした科学教育普及事業へ反映</p>	<p>①科学実験教室・実験講座及び出前科学実験教室で行われた実験に基づく興味関心を高めるような玉手箱の改良及び新規開発</p>	<p>①実験キットを収納したワクワクドキドキ玉手箱は、現在23あるが、今年度、電気関係の玉手箱として「静電気」の玉手箱を新規開発し、24とすることができた。また、既存の実験テーマとしてあった「ペンハムのコマ」について、事業報告書や科学ボランティア団体の意見要望をふまえ、この「ペンハムのコマ」の実験器具の改良を行った。</p> <p>達成度：4</p>	<p>出前科学実験教室で行われた内容をふまえると多様なニーズがあり、玉手箱の改良について今後も積極的に取り組んでいく必要があると考える。しかし、収納場所の関係から、既存の玉手箱を精選して整理していく必要がある。</p>	<p>●「ワクワクドキドキ玉手箱」の改良を継続したほか、実験テーマを1つ新規開発し24とした点は評価される。</p> <p>●科学分野における「調査研究」のあり方には難しい面はあろうが、その最終的な帰結点として出版公表を行うべきである。H28およびH29年度には、職員による講座を自己検証した論文が当館紀要上で公表されており、今後は、本分野における調査研究活動の一方性としてよいのではないかと考える。</p> <p>●従来の実験教室や講座への参加者へのアンケートの実施結果を参考にしてテーマを決め、開発することも必要と思われる。</p> <p>●興味や関心を高める（いわゆる派手にウケる）ものばかりでなく、地味ながらも大事な原理を理解することのできる玉手箱も開発してほしい。何を理想として玉手箱を開発するかという方向性や方針を明示してほしい。</p> <p>評価：B</p>

#### 4. 収集保存事業

標本やデータ等の所蔵資料を分類・整理して適切な保存管理を行い、川崎市域の貴重な自然史資料・天文資料を次世代へ確実に継承します。データベース化した所蔵資料の公開や、資料を使った講座の開催等により、所蔵資料の効果的な活用に努めます。

##### (1) 自然資料

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 収蔵資料のより効果的な活用</li> <li>● GBIF等国際機関への資料情報の提供</li> <li>● 研究機関への資料の貸し出しについて検討</li> </ul>	① 収蔵資料の再整理・分類・配架および電子台帳整備 ② 収蔵資料目録の作成及び「サイエンスミュージアムネットワーク(S-Net)」[地球規模生物多様性情報機構(GBIF)]へのデータ提供による、国内外への収蔵資料情報の公開	① 2018年度は、昆虫綱(半翅目セミ科・甲虫目ホソカミキリムシ科・同カミキリムシ科)について、標本整理および登録番号の付与、配架、電子台帳整備を行った。それらは資料目録を作成、「青少年科学館紀要第29号」において公表する予定である。脊椎動物では、哺乳類9点および鳥類18点の剥製(仮剥製)標本のほか、種子植物およびシダ植物のさく葉標本を作製した(各登録点数の計数は、「神奈川県植物誌2018」発刊まで作業一時停止中)。このほか、収蔵保管、常設展示および自然ワークショップ等の普及行事で使用するための昆虫標本を作製した。 ② 植物ほか標本データを世界に向けて公開すべく、7,000点をS-Net、GBIFへ情報提供した。精力的な取組により、昨年度の3,000点を上回る標本データを提供し、国内外に広く公開されることになる。		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 限定的な職員体制やその専門性の中で、資料整理に続き、わずかな分類群ではありながら、目録出版による情報公開を行った点は大きく評価される。この事に関連するが、前年度を大きく上回る7,000点の標本データについて、GBIFを通じて国内外へ向け公開した点は高く評価できる。</li> <li>● 収蔵庫研究利用実績が2月末現在でのべ73件378人に上っている点は、有効な利活用と言う点で評価できる。</li> <li>● 既存、既整理の収蔵資料については着実な情報公開が進んでいる一方で、新たな収集活動はほとんど進展していない。教育普及事業を含め、すべての博物館事業の起点となることから、今後の進展が強く望まれる。</li> </ul>
		達成度：4		評価：A

##### (2) 天文資料

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 収蔵資料のより効果的な活用と公開</li> <li>● プラネタリウム番組や解説資料のアーカイブの作成</li> </ul>	① 天文学史的資料の整理・保存 ② プラネタリウム番組の制作時に収集した資料、素材のアーカイブ化の実施	① 富田氏・箕輪氏資料の整理、リストの作成を引き続き行った。また、火星接近にちなんだ西郷星錦絵の展示を行うなど、所蔵資料をプラネタリウム投影や展示に活用した。 ② 太陽表面等、観測データの保存と画像処理を行い、プラネタリウム投影等に活用できるよう整理した。また、番組制作時の資料を整理するとともに、制作した番組の素材、データの保存を実施した。収集保存した資料、映像等はプラネタリウム解説の他、ポスター、リーフレット等の素材として活用した。		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 収蔵品を展示に活かすなど、工夫がみられる。また、ビジュアルデータを来館者のアイキャッチなどに活用する点は評価できる。</li> <li>● 収蔵資料の整理については、リストの作成実績が見える形にする工夫が必要である。</li> <li>● 収蔵資料のリスト化が進行している点は評価できるが、その終着点である情報公開まで至っていない点が課題である。継続的な整理作業と並行し、情報公開にも努めてほしい。展示や投影などの活用は収集保管事業に含めるべき点ではないが、独自の資料が洗い出せれば、館としてオリジナリティの高い教育普及事業に応用できる可能性もある。</li> <li>● プラネタリウム番組制作時に収集した資料、素材のアーカイブ化については、観測データの量や画像処理を行った点数など、実績が見える形にする工夫が必要である。</li> </ul>
		達成度：3		評価：B



## (3) 科学教育資料

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●科学実験教室に関するノウハウを整理・保管・共有化</p>	<p>①事業報告書等をもとにした各実験教室のデータの共有化</p> <p>②開発した実験道具等の保管・整備</p>	<p>①科学実験教室ごとに報告される報告書の管理及び実践事例等の収集を行い、「実践事例集」作成に努めた。</p> <p>②玉手箱の管理と保管と利便性の向上のため、よく使われる玉手箱の消耗品・材料などの補充をおこなったり、内容物の整理整頓に努めたりするなど、月1度玉手箱の整備作業を実施した。</p> <p>-----</p> <p>達成度：3</p>	<p>玉手箱の利用状況は、その年度により大きく変化する傾向はあるが、より利用頻度の多い玉手箱の充実に努めるとともに、利用頻度少ない玉手箱については整理を行う必要がある。</p> <p>しかし、玉手箱についての周知が不十分な面もあるため、今後もPRの強化に努める必要がある。</p>	<p>●科学分野における資料収集保管は、他分野と事情も異なるであろうが、実施事業の事後報告書の管理や実践事例集の収集は評価できる。今後は、その講座タイトルの簡単なリスト（目録）化を実施するだけでも、将来的には、第三者による探索や各事業の再検証が行いやすくなると思われる。</p> <p>●「実践事例集」はどのようなものか。年報への記載が望まれる。</p> <p>●玉手箱管理の方針をハッキリさせてから、整理に着手するのが望ましい。</p> <p>●利用頻度の改善には、PR強化だけでなく、名称の変更も考慮されてはどうか？柔軟な発想で取り組まれることを期待する。</p> <p>-----</p> <p>評価： B</p>

5. ネットワーク事業

生田緑地内の文化施設をはじめとする多様な団体や関係機関との連携により、市民・利用者にとって魅力的な活動を幅広く展開します。多様な団体や関係機関が、それぞれの専門性や地域性を生かして連携することで、相互補完や相乗効果による総合力を高めることをめざします。

(1) 展示・企画

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
●市民や研究機関・企業との共同企画展の開催等、パートナーシップによる事業を実施	①関連団体との事業の企画実施（理研よこはまサイエンスカフェの実施協力、神奈川県立青少年センター、専修大学との事業共催）	○神奈川県立青少年センターと協働し、ハンダごてを使って電子回路を作り、オリジナルの四輪駆動ロボを工作し、競技会「ブチロボで競争しよう 川崎②大会」を科学館で開催した。たいへん好評であったが、当日欠席が多かったのは残念であった。  ○（株）富士通ソーシャルサイエンスラボトリーと協働し、生田緑地サマーミュージアムの日に、スマートフォンを顕微鏡にすることができ、スマホ顕微鏡を活用した観察などを行う科学実験教室「親子で楽しむミクロの世界～スマホ顕微鏡を使ってみよう！～」を開催した。当日のイベントの影響もあるのか、当日キャンセル待ちでもよいかから参加できないかとの問い合わせが多く寄せられた。  ○専修大学ネットワーク情報学部2年コンテンツデザインプログラムを専攻する学生と協働し、「FIELD MUSEUM：親子で楽しく学べるカガクおもちゃのデザイン展」を開催した。  ○今年度は、多くの関連施設および企業、大学との共催事業を数多く開催することができたのはたいへんよかった。今後も、共催できる事業については、積極的に共催し、科学館の認知度を高める取り組みとして、取り組んでいきたいと考える。	館独自の事業ではなくても、科学館の取組を知ってもらったり、認知度を高めることのできるような連携・共催事業については、積極的に取り組んでいく必要がある。	●企業・大学等との共催事業が数多く開催されたことは評価できる。多様な実施形態のイベントの開催は課題で指摘されているように認知度の向上に効果があると思われる。  ●十分な成果を上げていると思われる。他の事業との兼ね合いからオーバーワークにならないような配慮が望まれる。  ●「親子で楽しむミクロの世界～スマホ顕微鏡を使ってみよう！～」で多くの参加者を得られたのは評価できる。今後はどのようなタイミングで、どのような内容のワークショップに人気が集まるのかを分析し、多くの方が参加できる様な運営が望まれる。  ●多様な連携先との協働あるいは共催による事業実施は評価できるが、その中で科学館側がどのような姿勢を示し、または主体性を発揮したのかは、必ずしも明確ではない。この事に関連して、どのように認知度を高められるかの検討が必要である。
		達成度：4		評価：A

(2) 調査研究・収集保存

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
●各団体や機関が保有する資料の相互提供や情報共有の仕組みづくり	①市民調査団体（「かわさき自然調査団」「神奈川県植物誌調査会」と連携協力	①生田緑地における動植物の調査、資料収集、標本化について、「かわさき自然調査団」に委託して実施した。実施にあたっては、作業内容の検討及び収蔵庫や諸室の利用等について、連携協力した。（委託事業については、「5 調査研究事業（4）」に掲載） 市域の自然環境調査の成果をまとめた一般向け普及用冊子「川崎のいきもの（仮称）」の発刊に向けて、体裁や内容等について「かわさき自然調査団」と協議するとともに、過去の資料（記録）の収集・整理作業等を、委託により実施した。  「神奈川県植物誌2018」の刊行に向けた「神奈川県植物誌調査会」による当館収蔵資料の確認作業等において、当館が「川崎ブロック」拠点として、収蔵庫等諸室利用、情報提供等の連携協力を行った。		●市民団体への委託部分に関しては、その実績の把握（モニタリング）が不可欠で、その内容や質量に応じて、委託の仕様を恒常的に再検討し続ける必要がある。  ●市民団体との連携は、博物館活動を活性化させ、実績を伸ばす意味でも重要であり、今後も積極的な推進が望まれる。ただし、館職員が市民団体とどのように向き合うのか留意するとともに、市民団体の活動趣旨や生田緑地での立場を明確にして連携協力する必要がある。  ●冊子発行に関しては、昨年度も協議中であった。デッドラインを決めてバックデートしたスケジュールを立てるなど、実現に向けた具体的な取り組みが期待される。
		達成度：3		評価：B

## (3) 学習支援

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●教職員、ボランティア団体、科学館の協働により学習プログラムを開発・実施する体制の構築</p>	<p>①職業体験の実施 ②小学校や中学校ごとの理科優秀作品展の開催 ③中学校連合文化祭開催への協力 ④教員社会体験研修の実施 ⑤大学からの依頼により実習生を受け入れて博物館実習を実施する ⑥「宇宙の日」記念絵画コンテストの開催 ※学校教育関連項目については、教育普及の頁を参照</p>	<p>①職業体験・職業インタビューを実施した。 主に中学校からの要請に基づき、館の施設概要・事業紹介、自然資料整理や受付待遇、館内放送体験等、各分野職員の協力により、内容の濃い1日体験とした。</p> <p>②「川崎市小学校理科優秀作品展」および「川崎市中学校理科優秀作品展」を開催した。 館内の壁面を利用し、児童生徒の理科自由研究作品の中から優秀作品を展示した。</p> <p>③川崎市中学校連合文化祭の理科部門（多摩区、麻生区、宮前区）の会場として、開催に協力した。 165名の生徒・教育が来館し、優秀作品の発表会を行うとともに、プラネタリウム投影を鑑賞してもらい、地域の中学生に当館の魅力を認識してもらった。</p> <p>④川崎市における理科担当教員の実践研修の場として、教科カリキュラム、各種教員研修を所管する川崎市総合教育センターと連携協力し、多彩な研修を実施した。また、他都市、私立学校の研修要請にも協力した。</p> <p>⑤6大学11人の博物館実習生を受け入れ、8月に集中して10日間の実習を行った。</p> <p>⑥「宇宙の日」記念全国小中学生絵画コンテストに参加した。 市内小中学生より応募のあった作品の取りまとめ、優秀作品を選定のうえ主催者に出品した。また、当館で優秀作品の表彰式を行い、作品を展示した。</p>		<p>●小中学校の学習活動や教員研修を広く受け入れており、教育現場のサポート、児童生徒の学習支援や関心を高める活動は高く評価できる。</p> <p>●限定的な体制の中で、多様なプログラムを実施した点は高く評価できる。実施にあたっては、科学館側がどのような主体性（監修や指導、評価など）を発揮したのが明確にすることが望ましい。その教育効果についても、どのように定量的な自己評価を行えるかが課題と考えられる。</p> <p>●「理科優秀作品展」や「宇宙の日絵画コンテスト」等は、科学館が選定評価を行ったのか、それとも展示会場を提供したのか、記載することが望ましい。</p> <p>●プラネタリウムの上映のように科学館の事業とのすみ分けが明確でないものもあり、結果としてオーバーワークにならないよう配慮が望まれる。</p>
		達成度：3		評価：A

(4) 地域振興・生田緑地内

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●地域の団体が生田緑地を活用して企画・実施する事業を支援</p> <p>●生田緑地の自然等に関する知識や科学館のノウハウを活かした専門的な支援を実施</p> <p>●生田緑地内施設間における情報共有化による、運営の効率化</p> <p>●広報媒体の共同利用や共通情報のデータベース化等、広報活動の連携</p>	<p>①図書館、区役所等との共催事業の実施</p> <p>②大学・地域団体との共催事業の実施</p> <p>③生田緑地サマーミュージアムの実施（指定管理者との連携による円滑な事業運営体制の構築と継続）</p> <p>④日本民家園との「七夕」「お月見」等、生田緑地内他施設との共催事業の実施</p> <p>⑤生田緑地内各施設及び指定管理者との情報共有による横断的広報活動の推進。スタンプラリーの開催など、各館の回遊性推進に向けた取組みの実施</p>	<p>①川崎市立多摩図書館と連携し、プラネタリウムの星空投影と本の読み聞かせのコラボ事業「物語でめぐる星の世界」を開催。図書館、科学館それぞれの利用者に好評であった。 多摩区民祭ほか、多摩区役所が生田緑地で実施する諸事業に協力するとともに、多摩区役所との連携・協力により当館ほか生田緑地各施設の広報活動を推進した。</p> <p>②専修大学の課題解決型インターンシップに、生田緑地の施設として協力し、学生が企画・開催し、生田緑地の各施設を紹介する「ぐるっとガイドツアー」を支援した。</p> <p>③第2期指定管理者が初めて実施するサマーミュージアムに、3館それぞれの魅力を活かした事業を実施して協力した。当館では自然ワークショップ、実験工房、天文写真展をそれぞれスペシャル実施。また、市内企業との共催による科学実験教室も実施し、サマーミュージアムで生田緑地を訪れた多くの市民の参加があった。</p> <p>④「七夕体験」「お月見デー」の共催は、民家園の夜間開放や当館の夜間プラネタリウム投影・ナイトミュージアム等、夜間事業として多くの来館者があった。2館の魅力発信のほか、職員間の交流の活発化にもつながった。</p> <p>⑤平成30年度より指定管理者が交代したが、適切に連携・情報提供を行い、広報刊行物の配布、ホームページ・SNSの更新は問題なく行われた。 回遊性向上については、指定管理者と各館の広報担当者による定期的な会議において情報共有を図り、スタンプラリーの実施、館相互の広報協力などを行った。</p> <p>達成度：4</p>		<p>●多摩図書館とのコラボによる読み聞かせは、「図書館」と「博物館」の利用者それぞれに強制的に関心を持たせる試みとして非常に面白く、広がりがある。近隣施設である日本民家園とのコラボも同様であり、新規の来館者を増やす試みとして評価できる活動である。</p> <p>●図書館、区役所、近隣大学等との共催事業が開催され、また第2期指定管理者を介して緑地内3館の共催イベントがいくつも企画開催されている。これらの事業は市民への緑地の周知と利用者の増加につながっていると思われる。</p> <p>●多様な主体との事業展開は、館活動を活性化させ、知名度向上にも貢献するが、他の事業との兼ね合いでオーバーワークにならないよう配慮が望まれる。</p> <p>●自館での事業も多い中で、多様な連携、共催事業を実施した点は評価される。ただしその中には、科学館としてどのような専門性（監修や指導など）を発揮したのが明確ではないものもある。今後、同様な共催事業を行うにあたり、自然系博物館施設としての専門性や特性の発信に、引き続き留意することが望まれる。</p> <p>評価： A</p>

6. 管理運営

運営方針

(1) 市民・利用者の参画と協働による柔軟な管理運営

誰もが親しみをもてる開かれた科学館であるために、市民・利用者が主体的に参画できる仕組みを整え、多様な意見・要望に応える柔軟な管理運営を展開します。

(2) 安定的で持続可能な成長をとげる管理運営

安全・安心で快適な施設であるために、適切なメンテナンスと時宜に応じた改善を行うとともに、多様な利用者や利用形態に応じたきめ細やかな対応やサービスによって、市民・利用者の満足度を持続的に高める管理運営に取り組みます。

(3) 民間活用等による効果的・効率的な運営

科学館の質や魅力を高め、サービスの向上を図るとともに、経営的な視点による効果的・効率的な管理運営を推進します。

(1) 管理業務

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<p>●指定管理者との連携による効率的、効果的な施設運営の推進</p> <p>●開館時間の弾力的な運用の実施</p> <p>●館の魅力向上を図る一方で、経営的な視点による効率的、効果的な収支計画の実施</p> <p>●協議会実施による、館運営、事業の専門性、透明性、公平性の確保</p> <p>●ボランティア登録制度の設置</p> <p>●関係団体との連携による運営</p> <p>●震災・風水害等各種災害を想定した危機管理マニュアルの作成と周知</p> <p>●危機管理マニュアルに沿った、適宜の研修及び訓練の実施</p> <p>●生田緑地及び緑地内施設と連携した災害対策の実施</p> <p>●運営基本計画に基づく事業の執行、及び適正な進行管理</p> <p>●多様な視点を反映し、定量評価を盛り込んだ自己評価の実施</p> <p>●諮問機関等による第三者評価の実施</p> <p>●年報・ホームページ等による評価の周知</p> <p>●館の持続的な成長に向けた、単年度評価結果の次年度事業計画、指標等への反映</p>	<p>①指定管理部門と市直営部門との円滑な連携確保</p> <p>②川崎市社会教育委員会議青少年科学館専門部会の開催</p> <p>③収蔵資料の保全を含む館の危機管理マニュアルの内容整備、定期的な訓練等の実施。生田緑地全体の危機管理マニュアルに基づく、緑地内他施設と連携した危機管理体制の確保</p> <p>④専門部会での適切かつ効率的な事業評価のための方式・スケジュールや学芸事業10年計画の見直し</p>	<p>①新たな指定管理者による第2期指定管理（5年間）の1年目として、管理運営・広報業務を前任者から確実に引継ぐとともに、市の学芸部門との業務分担や連携体制を速やかに構築した。</p> <p>第2期より施設管理担当者1名が確保された。また、事務・学習来館等受付と、プラネタリウム受付・監視スタッフのローテーション配置が実施され、効率的な管理運営が図られている。</p> <p>②年4回専門部会を開催し、事業計画、視察、事業報告等を行い、事業評価をいただいた。（詳細は④）</p> <p>③新たな指定管理者が前任者から引継いだ館及び生田緑地全体の危機管理マニュアルの周知を図り、市職員と連携して対応体制を確認した。</p> <p>これまで実施してきた消火訓練、避難訓練を継続するとともに、6月に発生した「大阪府北部地震」を踏まえ、館内施設設備の安全総点検を実施、コインロッカーや器具棚の転倒防止等の対策を行った。また、今後の定期点検のため、館内防災点検表を作成し、市と指定管理者が合同で11月より毎月点検・報告を開始した。震災を教訓に、館内の要注意箇所を把握し、定期点検を行うことにより、職員の防災意識が高まった。</p> <p>④事業評価作業の効率化を図るため、学芸事業10年計画、事業評価項目の整理・見直しを行った。この見直しを反映させた事業報告、自己評価により、事業評価をいただいた。</p>	<p>第2期指定管理の2年目以降、民間のノウハウを更に活かした管理運営に向け、市も連携・協力を行う必要がある。</p> <p>適切かつ効率的な事業評価のため、引き続き検証・改善を進め、専門部会全体の充実を図る。</p>	<p>●第2期の新たな指定管理への移行に当たり、円滑な引き継ぎを行い、学芸部門との分担や連携を速やかに構築した点は評価できる。</p> <p>●防災対策には、人的および施設被害への対策のみならず、将来世代へ確実に資料を継承するとの使命を担う博物館施設の性質から、公共財産である自然史資料とその属性（台帳等）への被害予防をも視野に入れた防災対策のマニュアル化に努めてほしい。</p> <p>●収蔵資料の保全を含む危機管理マニュアルについて、計画どおり速やかに整備することを望む。</p>
達成度： 4			評価： B	

(2) 科学館の魅力を高めるサービス展開

中長期的取組	平成30年度主な計画	平成30年度実績・自己評価	今後の課題	専門部会評価及び主な意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>●各種出版物の発行</li> <li>●多様な媒体を活用した広報活動（一部指定管理業務）</li> <li>●生田緑地全体の広報活動と連動した効果的な情報発信（全部指定管理業務）</li> <li>●職員の資質の向上（一部指定管理業務）</li> <li>●館全体の魅力向上に向けた、カフェテリア・ショップのサービス向上（一部指定管理業務）</li> <li>●展示室以外（実験室や学習室等）のスペースを活用した学習サービスの提供</li> <li>●学校団体の利便性に配慮したサービスの提供（全部指定管理業務）</li> <li>●他施設との連携によるサービスの向上（一部指定管理業務）</li> <li>●利用手続きにおける利便性の向上（一部指定管理業務）</li> <li>●バリアフリーの実現とユニバーサルデザインの導入</li> <li>●外国人利用者に配慮した案内情報の提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①広報業務を担う指定管理者と、学芸部門の積極的な連携・協力による、情報発信の推進</li> <li>②バリアフリー関連設備・表示等の保全、対応研修等人的支援の確保</li> <li>③館内案内表示等の適切な管理、展示解説シートの作成等、外国人利用者の利便性の向上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①当館では、土日祝日を中心に様々な体験教室や観察会、講座を実施している。学芸担当から広報担当に速やかに情報提供を行い、「科学館だより」等の広報紙のほか、ホームページや、FacebookやTwitter等のSNSによるタイムリーな発信に努めた。これにより、ホームページアクセス数246,342件（H29は289,807件）、Facebookいいね数1,289件（H29は1,151件）、Twitterフォロワー数2,058件（H29は2,118件）となった。</li> <li>その他、毎月番組が変わるプラネタリウム一般投影は、毎月ポスターを制作するなど、当館の特色を広く発信するとともに、新聞、雑誌、テレビ、ラジオの取材に積極的に協力し、幅広く広報活動を行うことができた。</li> <li>②指定管理者による生田緑地全体、当館単独の研修会を実施した。また、昨年度に市で制作した生田緑地バリアフリーマップを配布し、職員も周知・対応に努めた。</li> <li>当館ホームページのウェブアクセシビリティ（視覚障がい、多言語、スマートフォン対応など）対応のため、指定管理者と市職員で協議のうえ修正を行っている。来年度前半に公開予定である。</li> <li>③英語、中国語、韓国語の館内利用案内の配布を継続するとともに、昨年度に引き続き、展示解説シートの翻訳を行い、当館の博物館事業の性格や展示規模、ニーズを踏まえたインバウンド対応を行った。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●各種マスコミ取材への協力や、ホームページやSNSを含めた各種の速やかな広報は評価されるが、ホームページおよびTwitterに関する数値減少は分析を要する。中で何が行われ、また起きているか、タイムリーな発信が望まれる。</li> <li>●ホームページのアクセス数とは、どのような項目を集計しているのかを明確にするとともに、ページごとのアクセス数や滞在時間の分析を行い、よりよいホームページ作りの推進を望む。すべきである。</li> <li>●ホームページはパソコン対応のみならず、スマートフォン対応を図ることで、なお一層のアクセス数が期待できると考える。</li> <li>●インバウンド対応に関しては、利用者のニーズと情報入手方法を分析し、ターゲットを明確にした上で優先順位を付けて対応することが望まれる。</li> </ul>
		達成度： 3		
				評価： B